**第3章　人口**

**概況**

　昭和63年10月１日現在の本府の人口は、876万2509人で、62年10月１日から１年間に1万5267人増加し、増加率は0.17％であった。
　60年以降、人口の伸びは鈍ったものの、毎年４万人前後の増加を見せていたが、63年は、前年を２万1138人も下回る結果となった。
　なお、今回の伸びは、実数・率共に戦後最も低いものとなっている。
　人口増加を出生数と死亡数の差である自然増加と、転入と転出の差である社会増加の動きでみると、自然増加数は依然低下傾向が続いており、63年は、前年より4988人減って４万4064人となった。
　一方、54年を底にその後は回復傾向にあった社会減少数は、61年の7555人を最高に再び増加し、63年には前年を１万6150人も上回る２万8797人となった。
　また、世帯数は301万6246世帯で、この１年間に３万1664世帯（1.06％）増加し、初めて300万世帯を超えた。

**転入と転出**

　住民基本台帳人口移動報告による本府の転入と転出をみると、昭和62年１月１日から同年12月31日までの１年間の転入者は、前年より1511人下回る20万8537人となった。また、転出者は前年より4569人上回る22万7190人となり、この結果、転出超過数は前年より6080人増え１万8653人となった。

**年齢構造**

　昭和60年国勢調査結果による本府の人□の年齢（３区分）構成をみると、年少人口（0～14歳）は185万179人、老年人口（65歳以上）は71万6579人、生産年齢人口（15~64歳）は609万3737人で、総人口に占める割合は、それぞれ21.3％、8.3％、70.3％となっている。年少人口は、第２次ベビーブーム（昭和46～49年）による出生増で、50年には212万992人となり総人口の25.6％といったん増加したが、その後、出生率の低下により減少に転じ、50～55年には５万3409人減少、55～60年には21万7404人と大幅に減少し、総人口に占める割合も55年は50年より1.2ポイント低下、60年には55年より更に3.1ポイント低下して21.3％となった。
　一方、老年人口は40年から５年ごとに10万人前後増加しており、総人口に占める割合は着実に拡大し60年には8.3％となっている。また、生産年齢人口は、第１次ベビーブーム（昭和22～24年）に出生した人口が、15歳以上に達した40年に総人口の72.5％を占めたのをピークに、その後人口は増加しているものの、割合は低下傾向にあった。しかし、55～60年には30万人を超える増加となり、60年の総人口に占める割合は、55年より2.0ポイント上昇の70.3％となった。
　次に、５歳階級別人口をみると、0～４歳人口は、50年に第２次ベビーブームによる出生増で81万6605人（総人口の9.9%）に達したが、その後、出生率の低下に伴い減少を続け、60年には51万7246人（同6.0%）となった。

**労働力人口**

　昭和60年国勢調査による労働力状態をみると、15歳以上人口681万316人のうち、労働力人口（就業者＋完全失業者）は419万7694人で、労働力率（15歳以上人口に占める割合は61.6％である。一方、経済活動に従事していない家事従事者、通学者、老齢者などの非労働力人口は259万2990人であった。

**人口動態**

　本府の出生率の推移をみると、第２次世界大戦直後の昭和22年から24年頃までは、人口千人に対して30以上の効率を示していたが、その後は低下を続け、32年に15.2とそれまでの最低を記録した。翌33年から上昇に向かい、42年には23.2となり、以後横ばいの状態が続いていたが、47年からは再び低下傾向を示している。
　昭和62年の本府における出生数は、９万4828人、出生率（人口千対）は11.1（全国11.1）となっている。これを市町村別にみると、島本町（13.5）、泉大津市・茨木市（12.3）、高石市（12.2）などが高く、豊能町（6.4）、河南町（6.7）、田尻町（7.5）などが低くなっている。
　一方、本府の死亡率の推移をみると、昭和22年に人口千人に対し14.5であったのが、戦後のめざましい医学の進歩、生活環境の改善等により、46年には5.1にまで低下し、以後横ばいの状態を続けている。
　昭和62年の本府における死亡数は、４万8488人、死亡率（人口千対）は5.7 （全国6.2）となっている。これを市町村別にみると、能勢町（9.3）、岬町（8.5）、田尻町（7.9）などが高く、島本町（3.5）、箕面市・交野市（3.8）、枚方市（4.0）などが低くなっている。
　なお、昭和62年の本府における死産数は、5178胎（出産千対の死産率51.8）、婚姻件数は５万4257件（人口千対の婚姻率6.3）、離婚件数は１万3886件（人口千対の離婚率1.62）となっている。
　次に、昭和62年の日本人の平均寿命（0歳の平均余命）は、厚生省の簡易生命表によると、男子の平均寿命は75.61年で前年に比べ0.38年の延びを示し、女子の平均寿命は81.39年で前年に比べ0.46年の延びを示した。
　これを国際的にみると、国により生命表の作成基礎期間等が異なるため、厳密な比較はできないものの、男子73年、女子79年を超えている国は、日本のほかオランダ、アイスランド、スウェーデン及びスイスとなっている。この中で男子74年、女子80年を超えているのは、日本とアイスランドであり、日本の平均寿命は、男女とも世界のトップグループに入っている。
　なお、昭和60年地域別生命表（厚生省作成）から大阪府の平均寿命をみると、男子74.01年、女子79.84年で、47都道府県中（全国男子74.95年、女子80.75年）男子46位、女子47位となっている。